

「ヒゲの校長と函館聾学校」

北海道函館聾学校 校長 門 眞 義 弘

◎ 公開学術講演会と「ヒゲの校長」上映会！

(左)
高橋潔先生
(ヒゲの校長)
(右)
大曽根源助先生

令和4年12月3日に
高橋校長先生と大曽根
校長先生の母校である
東北学院大学の押川記
念ホールで映画の上映
会と学術講演会が行わ
れました。



「ヒゲの校長」とは、大阪市立聾学校で第6代校長を務めた高橋潔先生のことです。映画では「手話を守った校長」として描かれています。そして、日本の指文字を作った大曽根源助先生は、大阪市立聾学校の第7代校長です。大学の先輩と後輩であった2人が活躍するこの映画には描かれていませんでしたが、函館聾学校とは密接な関係にあったようです。大阪府立中央聴覚支援学校（旧 大阪市立聾学校）の教諭で自校の歴史に詳しい高間淳司先生から様々なエピソードを伺うことができました。高間先生は、令和4年12月に高橋校長と大曽根校長の母校である東北学院大学で行われた学術講演会において、発表者の一人として登壇し、高橋校長以外にも戦前期に11人はいたとされる東北学院出身教員の記録を含め同校の貴重な資料の整理の状況について報告されました。また、同校で自校の子どもたち向けに発行されている絵本「大曽根源助」「五代五兵衛と古川太四郎」「高橋潔」にも深くかわかり、作成に導いた方です。



大阪府立中央聴覚支援学校の赤木校長先生を通じてゆずっていただいた絵本（校内に展示中）

また、発表者の一人である前田浩先生にも函館聾学校との関係を示すお話をお聞きすることができました。前田先生は、大坂ろう就労支援センターの理事長でご自身が大阪市立聾学校に幼稚部から小学部まで在籍され、教員としても36年間同校にお勤めになったという生き字引のような方です。映画「ヒゲの校長」にも出演されています。私は、私の母校でもある東北学院大学で行われた学術講演会に参加し、講演を聞かせていただくと共に、できたばかりの映画を鑑賞することができました。このことは大変光栄であり、大きなご縁を感じざるを得ませんでした。高間先生には、講演会当日にも御挨拶をさせていただきましたが、この度、令和6年4月に着任された第27代校長の吉田伸哉先生から御紹介いただき、同校に残る資料から知り得た函館聾学校との関係をエピソードとして教えていただくことができました。

映画「ヒゲの校長」は、函館においても令和5年11月23日（祝日）に亀田交流プラザにおいて上映され、本校の児童生徒や教職員の一部も見られる機会に恵まれました。

◎ 大阪市立聾学校と本校の交流

本校と大阪市立聾学校の交流が始まったのは、1928（昭和3）年7月25日から28日まで函館市公会堂で挙行された第四回全国盲聾教育大会からだと考えられます。この大会は、本校の沿革にも記載があります。交流があったかどうかについて、残された資料に記載されているわけではありませんが、大会中に佐藤在寛先生（本校第3代校長）や篠崎平和先生（昭和3年に聾部教員に採用された。後の本校第4代校長。篠崎清次先生の息子。）が、高橋潔先生や大曽根源助先生に接触したのではないかと考えられています。高間先生曰く、「何故かといいますと、昭和5年の8月8日（2年後）に、アメリカ視察を終えたばかりの大曽根先生が来函されるなど、交流が増えていく事実があるからです。」と説明していただきました。実際、本校の創立90周年記念誌を見ても、大曽根先生が来函されたことが確かに記載されています。

◎ 大曽根先生が来函された理由とは

1930（昭和5）年8月8日、函館盲聾院にて大曽根源助先生らが作った試案の指文字がお

披露目となりました。

高間先生曰く、

「大阪府立中央聴覚支援学校にそうした記事は見つかりませんでした。佐藤在寛先生の次女や篠崎平和先生自身が証言しています。清野茂先生（「シリーズ福祉に生きる 19 佐藤在寛」（大空社）の著者）による卒業生の聞き取りでは、「ご高齢の卒業生は指文字が上手であったとのこと。」「指文字が函館盲啞院で使われるようになった一因には、口話主義が台頭してきた時代にあっても手話は排除しないという佐藤院長の考えがあったこと。」などから、指文字を受け入れ、自由に使える雰囲気があったためではと思われます。大阪市立聾啞学校教員の中川俊夫は、1938年の文献でこの指文字を採用している学校として、函館盲啞院の名前を挙げています。」とのことでした。

高間先生がまとめられた絵本「大曾根源助」には、「1932年（昭和7年）10月の創立十周年記念祭の時に新しく作った指文字を他の聾学校や一般の人たちに知ってもらうために発表しました。」と書かれており、その2年も前に函館でお披露目していることを考えると、2つの学校は、同じ考え方をもった同土のように感じていたのではないかと想像しています。

◎ 函館大火や災害時には支え合った！

別の原稿で、「函館は度重なる大火があり、校舎が焼けてしまって同じ場所に長くあり続けることはできませんでした。」と書きました。

1934（昭和9）年3月21日、函館では大火が起こりました。大阪市立聾啞学校から見舞金を贈ったという記事があるそうです。そのちょうど半年後の9月21日、室戸台風が全国各地に甚大な被害をもたらし、大阪市立聾学校も半壊しました。その際、全国各地の聾学校や団体から見舞金がありましたが、一番高額な見舞金があったのは函館盲啞院からだったそうです。（正確には盲啞院職員・生徒・聾啞部会の合同）。

高間先生曰く、

「金額の問題ではないかもしれませんが、特に函館盲啞院はその半年前に大火という惨状にあったばかりで自分達が大変なのにも関わらず見舞金を贈ったということは、函館盲啞院と大阪市立聾学校が強いつながりをもっていた表れではないかと思っております。」とのことでした。

また、その際、見舞状が百通以上舞い込んだとのこと。函館盲啞院からも、佐藤在寛院長の名で見舞状を受け付けられている記録があるそうです。高間先生曰く、「本校の発行機関紙『会誌』

には、その見舞状の内容をいくつか紹介していますが、聾学校長からは3校だけの紹介に留まっており、その中に函館盲啞院も含まれています。『会誌』の編集者は本校教員の藤本敏文ですが、本校の教員たちも函館盲啞院とのつながりを意識して掲載したものと思われます。」と教えてくださいました。

◎ 函館から在寛先生の息子が奉職

佐藤在寛先生の三男であった佐藤廣平さんは、1939（昭和14）年から1941（昭和16）年までの3年間、大阪市立聾学校に奉職しました。その間、居候として教員の木村勝七郎先生の家に住み込んでいたそうです。1942（昭和17）年、佐藤廣平さんはフィリピンで戦死しましたが、その後、学校をあげて校葬が執り行われたそうです。それほど丁重に扱われていたのだと教えていただきました。

前田先生からは、「佐藤在寛先生は、校葬を行う際に大阪を訪れ、葬列に並んで歩いた記録があります。」と教えていただきました。

また、高間先生曰く、「佐藤在寛先生と高橋潔先生の個人的な交流については、1928年以後、晩年まで手紙によるやり取りが続いていたと思われます。手紙の現物も一通だけですが現存しています。内容については清野茂氏の著書に収録されています。（「シリーズ福祉に生きる 19 佐藤在寛」（1998年）P108～109）私も本書籍をもっていますので興味のある方は御覧ください。



高橋潔 先生



大曾根源助 先生



佐藤在寛 先生
(佐藤政次郎)

◎ 映画「ヒゲの校長」を視聴して（門眞）

（2022年12月6日）

当日は200名を超える参加があり、大盛況でした。手話や触手話の通訳及びUDトークによる情報保障があり、車椅子の参加者があるなど、とても多様な参加者による会になっていたと思います。

冒頭、大西晴樹学長の挨拶がありました。

大西学長が別件で訪れた大阪で、大阪府立中央聴覚支援学校を急遽訪問した際のエピソードと訪問時は不在だった赤木校長先生のメッセージを全文紹介していただきました。突然の訪問だったにもかかわらず、「宮城県の東北学院から来た。」ということを知ると、教頭先生が丁寧に対応してくれ、校内を案内した後、創立120周年記念誌をいただいたことを話されていました。また、赤木校長先生のメッセージでは、大阪市立聾学校と東北学院の関係の深さを実感すると共に、高橋潔校長先生と大曾根源助校長先生が自校の礎を築いただけではなく、全国の聴覚障がい教育に大きな影響を及ぼしたことを実感するという内容でした。また、その中で、今年度に入ってから函館聾学校の私との出会いをご縁としてご紹介いただきました。

講演後、大阪市立聾学校で子ども時代を学生として過ごし、教員としても30年以上お勤めになった前田先生とお話しさせていただきました。大阪市立聾学校の高橋校長先生と函館聾学校の佐藤在寛校長先生が手話を守ったという点で共通点があり、大曾根校長先生が指文字を発表する最初の地として函館を選ばれたこと、佐藤在寛先生の息子さんを大阪市立聾学校に派遣して勤めさせ、戦争に招集され戦死することになった際には、佐藤在寛先生が大阪へ出向き、大阪市立聾学校の皆さんで大きな葬儀をしていただいたことなどを教えていただきました。私は、私自身が聾教育に携わってきたこと、函館聾学校で勤務させていただいていること、東北学院出身であることなど、何かに代えがたいご縁を勝手に感じております。高橋潔先生や大曾根源助先生は、東北学院の校歌の歌詞にある「世の光」となられたのだなと思いました。

また、講演を担当された3名の先生方（遠藤先生、高間先生、前田先生）のお話や資料は、私にとっては新たな情報が多く、大変貴重な内容だと感じました。

映画に関しては、多くの方の思いを乗せてでき上がったため、深い感動を覚えました。後で知ったのですが、クラウドファンディングで資金を集めて制作されていたとか。また、描かれている風景や場面状況は、当時の時代背景を考えると、「すごい。」と思わされる様子が多々ありました。きっと当時は、現在を生きる私たちには想像を絶する差別の状況や言葉、態度、社会情勢があったはずだと思います。しか

し、描かれた明るく朗らかに立ち居振る舞う高橋校長先生を含めた大阪市立聾学校の教員の様子や姿には共感しましたし、驚かされました。象徴的に描かれた集合写真は、非常にその様子を表していました。宗教観からなのか、大阪市立聾学校は現在でいう「心理的安全性」に満ちあふれており、集合写真に笑顔で映る教員の姿には、子どもたちに接していた様子までもがうかがわれる表情で、子どもたちを第一に考えていたことが想像できる笑顔です。当時の写真は、真面目で難しい顔をして撮る場合が多かったことを考えると、あえて映した「笑顔」であり、私学だからこそできる教育を追求するための意図的で自然体の笑顔だったのではないかと思います。

また、当事者である聴覚障がいのある教員達と夜な夜な相談していた内容が、「手話か口話か」ではなく、「適性教育」であった点が素晴らしいです。口話を否定せず、口話が効果を上げる人もいるし、手話と口話をやった方が効果的な人もいるし、手話が効果的な人もいると、その子の適正に合わせて教育しようとしたことがすごい。だからこそ理解者が現れ、分かる人には分かったのだと思います。今の教育に通じており、人権意識をもち合わせた先見性が感じられました。

この映画は、北海道では美瑛町でのみ上映予定が組まれております。上映後、旭川聾学校で子どもたち等関係者向けに、映画制作にかかわった方のお話を聞く機会があると聞いています。

当時の北海道函館聾学校と大阪府立中央聴覚支援学校の様子に思いを馳せて、今できることを最大限に取り組んでいきたいと思います。

